



発掘された 京都の歴史 2021



企画展

かつて京都に
火山灰が降ったころ
—3万6千年前の京都—

主催：京都府教育委員会・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

2021 8.7 土 - 8.29 日

向日市文化資料館

京都府向日市寺戸町南垣内 40-1

2021 9.4 土 - 9.15 水

ふるさとミュージアム山城

(京都府立山城郷土資料館)

京都府木津川市山城町上狛千両岩

2021 9.22 水 - 10.10 日

ふるさとミュージアム丹後

(京都府立丹後郷土資料館)

京都府宮津市宇国分小学天王山 611-1

展覧会の開催に当たって

本展覧会は、府民の皆さまをはじめ、多くの方々に埋蔵文化財への興味や関心を持っていただき、遺跡や遺物に親しんでいただくことを目的に、京都府教育委員会と公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの共催で開催しています。

今回の展覧会は、発掘調査の速報展示と企画展示の2部構成で実施します。速報展示では、令和元・2年度に京都府内で各市町教育委員会、京都府教育委員会、当調査研究センターが実施した発掘調査の成果を出土遺物や写真パネルなどを用いて紹介します。また、企画展示では、「かつて京都に火山灰が降ったころ」と題して、令和2年度の調査で大きな注目を集めた京都府内最古の旧石器に焦点を当てて、旧石器時代の様子を紹介します。

展示に当たっては、より分かりやすく、親しみやすくなるように心がけましたので、いにしえの世界をお楽しみください。

結びに当たり、今回の展覧会に協賛いただいた向日市文化資料館をはじめ、様々なご協力を賜った関係機関に対し、深く感謝いたします。

令和3年8月

京都府教育委員会

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

凡 例

1. 本図録は、「発掘された京都の歴史 2021 かつて京都に火山灰が降ったころ」（向日市文化資料館：令和3年8月7日（土）～8月29日（日）、京都府立山城郷土資料館：同9月4日（土）～9月15日（水）、京都府立丹後郷土資料館：同9月22日（水）～10月10日（日）開催）の展示図録です。
2. 展示資料は、主催者及び府内各機関が主に令和元・2年度に発掘調査や整理作業を実施した遺跡・遺物を対象としています。
3. 本図録に掲載した資料は、展示品のすべてではありません。また、展示の都合により員数等が異なる場合があります。
4. 本展覧会は、令和3年度国宝・重要文化財等保存・活用事業費（地域の特色ある埋蔵文化財活用事業費）の補助金を受けて実施しています。
5. 本展覧会にかかる資料調査、図録作成、展示資料及び写真等の借用にあたっては次の機関からご指導・ご協力をいただきました。
（順不同・敬称略） 舞鶴市、京都市、与謝野町教育委員会、向日市教育委員会、長岡京市教育委員会、八幡市教育委員会、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、京都市考古資料館、公益財団法人向日市埋蔵文化財センター、公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター
6. 本図録の掲載写真は、主催者撮影のもののほかは、上記の各教育委員会及び各機関所蔵から提供を受けたものです。

企画展示 かつて京都に火山灰が降ったころ

日本列島とその周辺には、火山が多く存在しています。

企画展示「かつて京都に火山灰が降ったころ」では、おもに旧石器時代に焦点をあてます。この時代には、現代に生きる私たちが知っている噴火とは桁違いの大噴火がありました。大噴火に伴う大量の火山灰は、偏西風に乗り日本列島の広い地域に降り積もったことから、広域火山灰と呼ばれています。広域火山灰は、短期間に降り積もることから地域を超えた地層の年代を決める鍵層として認識されています。

旧石器時代の年代を考えるうえで、約3万年前に噴出した^{あいらたんざわかざんばい}始良丹沢火山灰(AT)と約6万年前に噴出した^{だいせんくらよしかるいし}大山倉吉軽石(DKP)が特に重要です。前者は鹿児島湾、後者は鳥取県大山から偏西風によって運ばれてきました。

みっかいちいせき 【三日市遺跡】

亀岡市千歳町千歳

後期旧石器時代

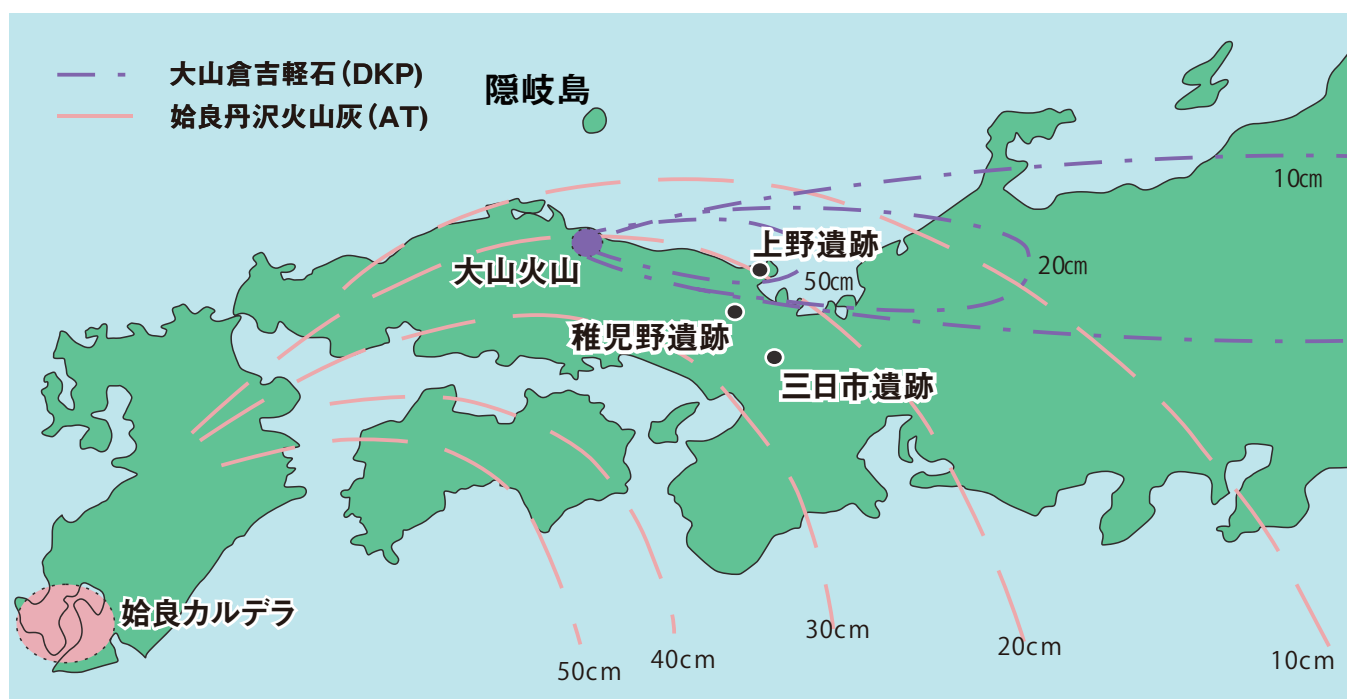
当調査研究センター調査

亀岡盆地の北東部に所在する三日市遺跡では、厚さ約2mの粘土層が見つかりました。堆積の特徴から湖の底に堆積したものと考えられます。この堆積層の中に厚さ約30cmの始良丹沢火山灰(右の写真中央の白い地層)と大山から飛来した上のホーキ火山灰が堆積していました。

調査地の周辺から石器は出土していませんが、三日市遺跡の北約600mに所在する^{ときづか}時塚遺跡では、後期旧石器時代のナイフ形石器が出土しています。



発掘調査で確認された火山灰層(亀岡市三日市遺跡)



始良丹沢火山灰・大山倉吉軽石の降灰範囲(数字は降り積もった火山灰の厚さを示します)

上野遺跡は、日本海に面した海岸段丘上に立地しています。令和元年度の調査では、始良丹沢火山灰と大山倉吉軽石が見つかりました。

今回展示している石器は、その2つの火山灰に挟まれた地層から出土しました。石器の形状から、約3万6千年前の後期旧石器時代前半期のものと推定されます。現在、京都府で確認された最も古い石器です。

出土した石器は、台形石器や鋸歯縁石器、挾入石器などがあります。使用されている石材には、調査地周辺で入手できないチャートや島根県隠岐諸島産の黒曜石も含まれていました。当時の人々の活動の広がりを知ることができる貴重な調査となりました。



上野遺跡の地層断面



上野遺跡で出土した京都府内最古の石器



日本海に面した上野遺跡の全景（南東から）

稚児野遺跡は、由良川の支流である牧川を見下ろす標高 100 m の台地上に立地しています。

令和元・2 年度の調査で、始良丹沢火山灰を確認し、その下の地層から約 900 点の石器が出土しました。京都府内で最も石器の出土点数が多い後期旧石器時代の遺跡です。

出土した石器には、槍先として使用されたナイフ形石器や動物の解体に用いられたスクレーパー、木の伐採などに使用された石斧^{せきふ}などがあり、当時の人々の生活のようすがうかがえます。

石器に用いられた石材は、産地が遠方のものもあり、上野遺跡の例と同じく、広範囲にわたる人々の活動を示しています（右下のコラム参照）。



稚児野遺跡出土の石器



稚児野遺跡の全景（西から）

【石材はどこから？】

稚児野遺跡で見つかった石材には、頁岩^{けつがん}、チャート、花こう岩、サヌカイト、黒曜石などがあります。このうち、花こう岩と頁岩は稚児野遺跡の近くで手に入れることができます。しかし、チャートやサヌカイト、黒曜石は稚児野遺跡の近くで手に入れることができません。

稚児野遺跡で使っているサヌカイトは、奈良県と大阪府の境にある二上山^{にじょうざん}のものと考えられます。また、黒曜石は、島根県の隠岐諸島のものであることがわかっています。

このように、旧石器時代の人々が、瀬戸内海側と日本海側の地域をさかんに行き来していたことがうかがえます。

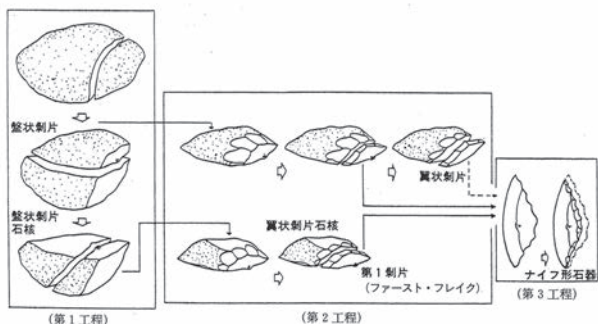


稚児野遺跡における遠方の石材産地

京都盆地の旧石器時代遺跡

京都盆地及びその周辺の台地上からは、今から約2万年前の国府型ナイフ形石器が出土します。特に長岡京市域や八幡市の美濃山丘陵上からの出土が目立ちます。

これらは、いずれも大阪府と奈良県の境にある二上山で産出するサヌカイトを用いて、瀬戸内技法で製作したものです。



瀬戸内技法概念図（旧石器談話会編 2000『旧石器考古学辞典』から転載）



- 1 ケン山遺跡 2 京都大学農学部構内遺跡 3 京都御苑遺跡 4 朱雀第六小学校 5 西院三蔵町
- 6 沢ノ池遺跡 7 萬福寺遺跡 8 広沢池遺跡 9 大枝遺跡 10 殿長遺跡 11 岸ノ下遺跡
- 12 北山遺跡 13 須本遺跡 14 今里遺跡 15 舞塚遺跡 16 小池下遺跡 17 奥海印寺遺跡
- 18 十三遺跡 19 開田遺跡 20 神足遺跡 21 南栗ヶ塚遺跡 22 山崎遺跡 23 山崎西遺跡
- 24 伊勢寺遺跡 25 慈願寺遺跡 26 弁天山D地点 27 郡家今城C地点 28 郡家川西遺跡
- 29 津之江南遺跡 30 橋本東遺跡 31 交北城ノ山遺跡 32 藤原宮山遺跡 33 津田三ツ池遺跡
- 34 金右衛門垣内遺跡 35 美濃山麓坂遺跡 36 芝ヶ原遺跡 37 ケケ庄二子塚古墳

右図：ナイフ形石器及び関連遺物が出土した主な遺跡（中川和哉作図 1998『長岡京市史本文編』から転載）

かいでんいせき じゅうそういせき 【開田遺跡・十三遺跡】

長岡京市開田および天神

後期旧石器時代

公益財団法人

長岡京市埋蔵文化財センター調査

当調査研究センター調査

長岡天満宮の北東側の地域では、発掘調査に伴ってナイフ形石器が出土しています。いずれも、後世の遺物包含層などから出土していますが、旧石器時代の遺構はまだ見つかりません。

長岡京市内では、このほか、今里遺跡や南栗ヶ塚遺跡でも旧石器時代の石器が発掘調査で見つかりしています。



十三遺跡出土のナイフ形石器

みのやまいせき 【美濃山遺跡】

八幡市美濃山

後期旧石器時代

当調査研究センター調査

美濃山遺跡は、大阪府との境にある低い丘陵上に立地しています。平成27年度から令和元年度にかけて2万㎡以上の調査を行いました。弥生時代から奈良時代にかけての集落跡の調査に伴い、遺物包含層などから旧石器時代の石器が出土しました。

すぐ隣の金右衛門垣内遺跡でも、石器が採集されており、今から2万年前、美濃山丘陵一帯に人々が生活していたことが明らかになりました。



美濃山遺跡出土の石器

速報展示 発掘された京都の歴史 2021

しんまちいせき 【新町遺跡】

京丹後市峰山町荒山

縄文時代早期

当調査研究センター調査

新町遺跡は、小規模な谷地形に挟まれた低い台地上に立地しています。これまで、弥生時代から中世にかけての遺跡と考えられてきましたが、今回の調査で、縄文時代早期後半頃の完形の土器を埋納した^{どこう}土坑が見つかりました。

出土した縄文土器は、^{ふかばち}深鉢で高さ 21.5cm、口縁部は波形に成形されています。

なお、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての^{たてあな}堅穴建物も見つかり、このころの集落が営まれていたことがわかりました。



縄文時代早期の深鉢



縄文土器の出土状況

さえきいせき 【佐伯遺跡】

亀岡市礪田野町佐伯

縄文時代中期～後期

京都府教育委員会調査
当調査研究センター調査

佐伯遺跡は、亀岡盆地西部の^{ちゅうせきち}沖積地に広がる遺跡です。これまでの調査で、縄文時代から中世にかけての集落跡であることがわかっています。

佐伯遺跡では、ほ場整備に伴う大規模な発掘調査の結果、対象地の東部の調査区（第8次調査地ほか）で縄文時代中期から後期にかけての遺物が出土しました。これらの多くは、縄文時代後期のものですが、平成30年度の第11次調査（京都府教育委員会実施）では、縄文時代中期末の土器が出土しました。



縄文時代中期末の縄文土器（第11次調査出土）



縄文時代後期の土器が出土した
第8次調査地の遠景（東から）

水主神社東遺跡は、木津川の右岸に広がる沖積地に位置しています。これまでの調査で、縄文時代から中世にかけての遺構が見つっています。

令和元年度の調査では、縄文時代の流路から水辺を利用するための木組み遺構や木道、杭列などが見つかりました。木組み遺構は、丸太材や割り材を並べ、横木を置いて杭で固定し、その上に直径10～



木組み遺構・木道・杭列全景（東から）

20cm 程度の^{れき}を置いていました。また、木道は丸太材を並べたもので、木組み遺構へ向かう足場として利用していることがわかりました。

これらの遺構は、流路内の流水を利用して食材や木材の加工を行うためのものと考えられます。



木組み遺構検出状況（西から）

日吉ヶ丘遺跡は、大規模な^{ほうけいはりいしば}方形貼石墓や貴重な鉄製品が多数見つかった丹後地域を代表する弥生時代の遺跡の一つです。

今回の調査では集落の北東部を調査し、深い^{かんこう}環濠が見つかりました。環濠は幅3mを測り、内側からの深さ2.2m、外側からの深さ約1mを測ります。環濠の内側では環濠に沿った^{さくれつ}柵列が見つっています。

環濠内からは、^{いくえ}幾重にも重なった^{しょうど}焼土遺構が見つかり、環濠の底近くからは多数の遺物が出土しました。遺物には、多量の弥生土器のほか、石斧、砥石、^{たた}叩き石、^{いし}石皿などの石製品やヒスイ製の^{まがたま}勾玉、^{くだたま}管玉の未成品などの装身具、動物形土製品などがあります。



環濠のようす（東から）（与謝野町教育委員会提供）



ヒスイ製の勾玉

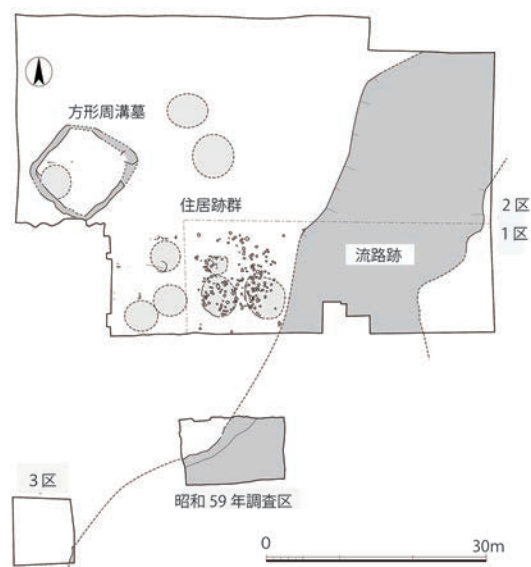


石斧

烏丸綾小路遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡です。学校建設に伴う発掘調査で、弥生時代前期末から中期前半にかけての竪穴建物、水田跡、流路跡などが見つかりました。特に流路跡からは、たくさんの弥生土器と石器が出土しました。土器の多くは地元で作られたものでしたが、近江地域や東海地域から運ばれてきたものも少量ですが出土しており、石斧や石包丁などの未成品を含む数多くの石器が出土しています。弥生時代中期後半には、墓域になり、方形周溝墓が営まれていました。



流路跡（南から）（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所提供）



遺構配置図（現地説明会資料を一部改変）

美濃山遺跡の発掘調査における大きな成果の1つに、弥生時代後期の集落跡が見つかったことがあげられます。弥生時代の竪穴建物が19基見つかり、そのなかには直径9mもある竪穴建物もありました。これらの建物の多くには屋外排水溝と呼ばれる溝が付属していました。京都府南西部から大阪府北東部にかけての竪穴建物に見られる特徴です。



調査地の全景（北から）



長い屋外排水溝を持つ円形竪穴建物（北から）



出土した弥生土器



小樋尻遺跡は、木津川右岸の沖積地に位置します。これまでの発掘調査では、縄文時代晩期から中世にかけての遺構・遺物が見つっています。

令和2年度の調査で見つかった古墳時代前期の流路跡は、縄文時代から弥生時代にかけての自然流路に手を加えて利用されていました。流路跡の一部に木材を杭で固定し、水流を調整する施設と、導水施設を確認しました。導水施設は堰板^{せきいた}で水を止め、上澄みの浄水^{じょうすい}を木樋^{もくひ}に流していました。おそらく、清浄な水を使った祭祀を行っていたと考えられます。

この流路跡は、古墳時代後期から奈良時代にかけて、灌漑用の水路として維持・管理されていました。



流路全景（東から）

地域の首長層によって灌漑施設の整備を始めとする大規模な開発が行われたことを示す貴重な資料といえます。

くりくまのおうなで
【栗隈大溝】

小樋尻遺跡が立地する沖積地一帯は、古代に「栗隈」と呼ばれていた地域です。『日本書紀』には仁徳朝や推古朝に栗隈の地に大溝が掘られ、田が潤ったという記事があります。

今回見つかった水路がこの大溝にあたるのかもしれませんが。



導水施設（北から）

余部遺跡は、亀岡盆地中央部の桂川によって形成された河岸段丘上に立地しています。縄文時代から中世にかけての遺跡です。

令和元年度の調査では、弥生時代から古代にかけての複数の水路を確認しました。長期間に渡り、何度も掘り直しながら、水路として利用していたことがわかりました。

水路からは、弥生時代中期から古墳時代にかけての木製品が出土しました。木製品の多くは完成品で、鋤^{くわ}や横槌^{よこつち}、田下駄^{たげ}などの農具や火きり臼^{ひうす}などが出土しています。農具が出土したことから、水路の周辺に耕作地が広がっていたと想定されます。



調査区全景（北から）

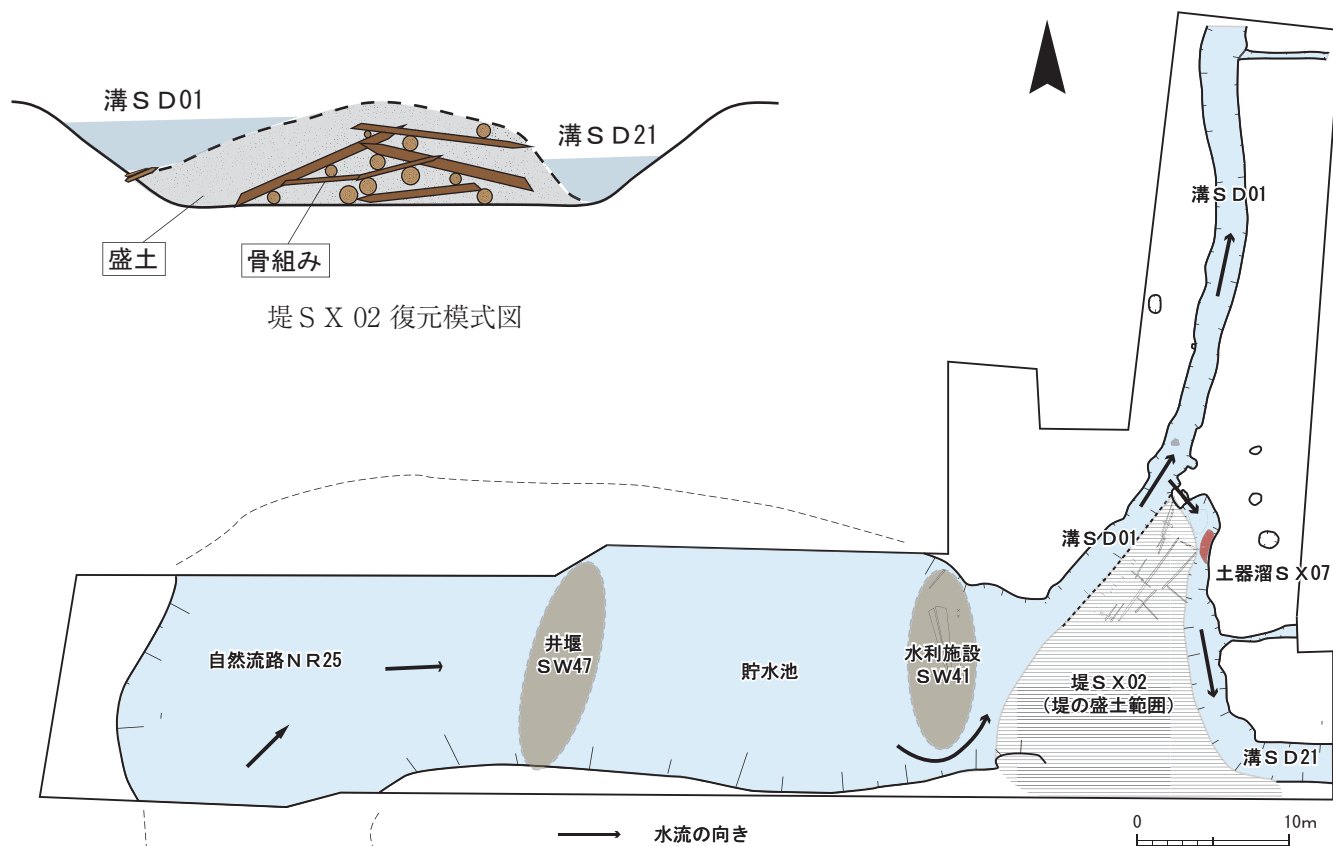
金生寺遺跡は、亀岡盆地南部の扇状地に立地しています。周辺耕作地の灌漑用として、川の流れをせき止めて、貯水するための水利施設が構築されました。当時の土木技術を知る上で貴重な成果となりました。

周辺では、祭祀に伴う土器がまとめて出土しました。これらの中には、徳島県や東海地方、山陰地方で作られた土器があり、金生寺遺跡の人々が広い交流関係を持っていたことがわかりました。



祭祀に使用された土器（土器溜 S X 07 出土）

水利施設 SW 41 全景（北から）



堤 S X 02 復元模式図

調査区平面図

芝山古墳群は、城陽市東部の丘陵上に分布する古墳群です。平成 27 年度から 6 年間の調査で、古墳時代前期から後期にかけての古墳を 37 基確認しました。

令和元・2 年度の調査では、合計 13 基の古墳を確認しました。前期末から中期前半のⅣ－4 号墳からは、中国製の方格規矩八禽鏡の破片が出土しました。また、中期後半のⅢ－2 号墳からは、蛇行剣が 2 本出土しました。蛇行剣は、西日本や南九州で多く見つかっており、京都府内では 3 例目となります。後期のⅠ－18 号墳やⅤ－4 号墳からは、木棺内に埋納された須恵器などが出土しました。



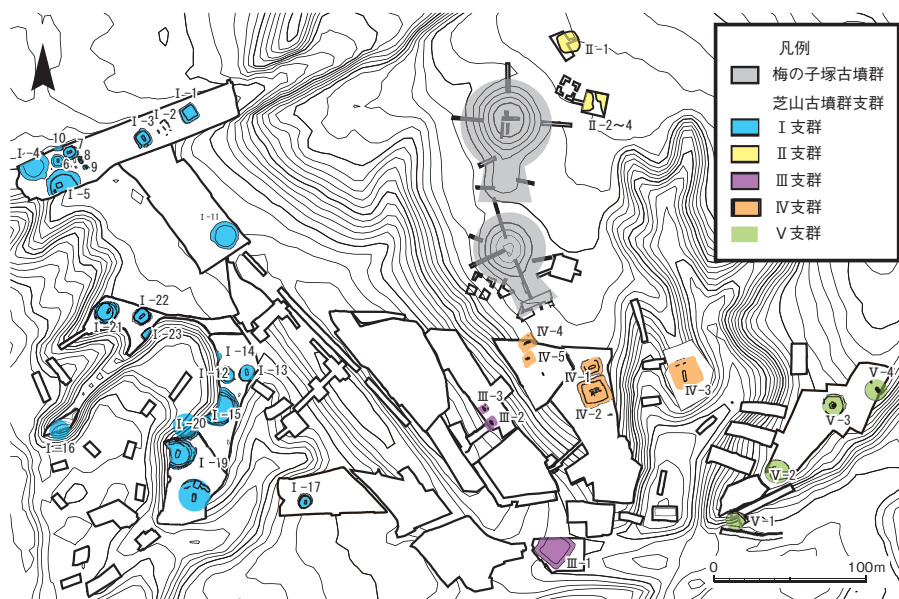
令和 2 年度の調査地西半部全景（南から）



芝山Ⅲ－2 号墳主体部（南東から）と出土した蛇行剣



芝山Ⅳ－4 号墳 粘土槨全景（南西から）



芝山古墳群分布図（既往の調査分を含む）



芝山Ⅳ－4 号墳で出土した方格規矩八禽鏡

幾何学文様と鳥の絵が描かれ、その内側に十二支の「午・未・申・酉」の漢字が書かれています。

法貴峠古墳群は、亀岡盆地南部の丘陵上に立地する 20 基からなる群集墳ぐんしゅうふんです。令和 2 年度に調査を行った 20 号墳は、古墳時代後期後半に築造された直径約 13 m の円墳です。内部には残存長 7.2 m の両袖式の横穴式石室りょうそくしき よこあなしきせきしつが構築されており、須恵器・玉類・鉄製品・耳環等じかんが出土しました。墳丘内部には、土留めの役割を持つ列石れっせきを部分的に確認しました。

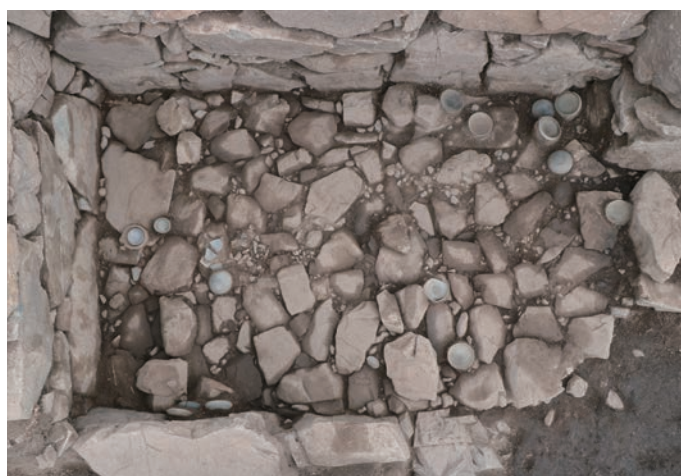
その後の鎌倉時代に、墳丘の一部を削って石組をもつ中世墓が造られました。



20 号墳全景（上が北西）



20 号墳横穴式石室全景（南東から）



横穴式石室内の遺物出土状況（左が奥壁）

宝菩提院廃寺は、飛鳥時代後期（白鳳期）に創建された乙訓地域有数の古代寺院です。長岡京遷都に伴い長岡宮が寺域のすぐ南東側に営まれます。近年では、宮に近接する数少ない京内の寺院「長岡寺」であったと推定されています（「廃寺」は寺名のわからない寺院跡の名称に使用）。

推定される寺域の東側においては、以前から創建時の瓦窯跡の存在が知られていましたが、令和 2 年度の調査では、これらの窯跡から離れた地点で



軒丸瓦

灰原および灰原の造成土が見つかり、多量の白鳳期の瓦が出土しました。蓮華文の軒丸瓦とともに出土した大棟を飾る蓮華文を 4 つ配置した鬼瓦や唐草文のある塼は珍しいものです。



調査地全景（西から）

（公益財団法人向日市埋蔵文化財センター提供）

ながおかきよせきうきょう
【長岡京跡右京第 1180・1198 次・伊賀寺遺跡】

長岡京市下海印寺

縄文時代～長岡京期

公益財団法人

長岡京市埋蔵文化財センター調査

長岡京跡右京第 1180・1198 次調査地は、小泉川の段丘上に立地します。病院建設に伴う発掘調査で、縄文時代から長岡京期にかけての遺構が見つかりました。

縄文時代から近世にかけての集落跡として伊賀寺遺跡が重複して所在します。これまでの発掘調査でもこのころの竪穴建物が多数見つかっています。今回の調査でも多数の竪穴建物や掘立柱建物（ほったってばしらたてもの）が見つかりました。特筆する出土遺物として古墳時代の仿製鏡（ぼうせいきょう）や飛鳥時代の鉄製の鋏先（ちさき）があります。

奈良時代から長岡京期にかけての遺構は、建物 4 棟、柵、井戸、池状遺構が見つかりました。これらの遺構は西に約 8° 振れた方向を基準に整然と配置されており、長岡京とは異なった地割（ちわり）が存在したようです。遺物は土器や瓦が少量出土しました。

長岡京期の掘立柱建物（北から）
（公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター提供）



古墳時代小型仿製鏡



しせきくにぎゅうせき
【史跡恭仁宮跡】

木津川市加茂町例幣

奈良時代

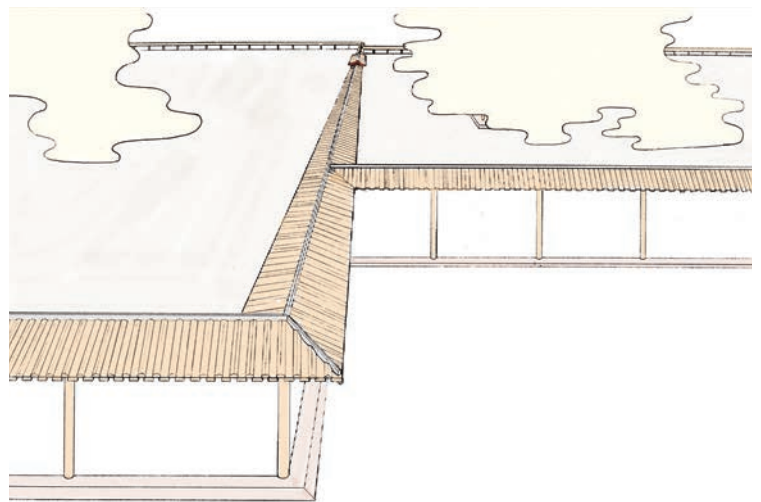
京都府教育委員会調査

恭仁宮跡は、天平 12（740）年に聖武天皇（しょうむ）が平城京から遷した都です。令和元・2 年度の調査で、朝堂院区画（ちょうどういん）の規模が確定（南北約 98.8 m、東西約 117.3 m）するとともに、大極殿院回廊（だいくでんいんかいろう）と朝堂院区画の接続部分の状況を検討するうえで貴重な成果を得ることができました。

なお、恭仁宮跡の調査は令和元年度に 100 回を迎えました。



朝堂院区画と朝集院区画の接合部の柱穴配置（東から）



朝堂院区画と朝集院区画の接合部の復原想像図

栢ノ木遺跡は、木津川の支流である玉川右岸の段丘上に立地しています。調査地は、奈良時代に左大臣を務めた^{たちばなのもろえ}橘諸兄が建立したと伝わる井手寺跡の寺域の東限に隣接しています。

調査の結果、五重塔と推定される塔の基壇跡^{きだん}とそれに伴う階段、雨落ち溝、石敷などが見つかりました。基壇跡の規模は、東西約 15.3 m、南北約 15.1 m と推定されます。基壇跡は、質の異なる土を交互に積み重ねる版築^{はんちく}によって築成されていました。

基壇跡の周囲からは大量の軒丸瓦・軒平瓦^{のきひらがわら}、平・丸瓦^{せうたるきさがわら}が出土しました。また、鬼瓦、施釉垂木先瓦、土師器、須恵器、^{りよくゆうとうき}緑釉陶器、^{かいゆうとうき}灰釉陶器、^{こんどう}鉄釘、^{ふうしょう}金銅製の風招など多彩な遺物が出土しました。

出土した瓦から、塔は奈良時代後半から平安時代前期に建立されたと考えられます。9 世紀中ごろの平安宮に使用されていた軒瓦も含まれており、嵯峨天皇^さの皇后となった^{たちばなのかちこ}橘嘉智子によって整備されたようです。



軒丸瓦・軒平瓦



青銅製の風招



塔基壇跡の全景（北西から）

美濃山遺跡の調査では、飛鳥時代から奈良時代初めにかけての掘立柱建物 27 棟が見つかり、大規模な集落が存在することがわかりました。土師器・須恵器などの日常雑器のほか、瓦片・ひさご形土製品・土馬など特殊な遺物も出土しました。

約 400 m 東に位置する奈良時代の美濃山廃寺^{みのやまはいじ}でしか出土していないひさご形土製品が出土したことから美濃山廃寺との物や人の往来があったことがうかがえます。美濃山廃寺を造営した人々の集落だったのかもしれません。



美濃山遺跡の遠景（南西から）

調査地は、長岡宮の東側、平成 12 年に発見された東院跡^{とういん}の西側にあたります。長岡京期の道路側溝^{そっこう}をはじめ、掘立柱建物、流路跡などが見つかり、多くの須恵器、土師器とともに多数の墨書人面土器や墨書土器などが出土しました。

墨書人面土器は流路跡から出土したもので、土器の中に災い^{わざわ}や穢^{けが}れを封じ込め、川に流していたと考えられます。

ほかに、縄文時代の石冠^{せつかん}が出土し、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の流路跡などが見つっています。

調査は、区画整理事業に伴うもので、現在も続いています。



墨書人面土器

史跡西寺跡は、京都駅近くの市街地に位置します。平安京遷都（794 年）に伴い、国家鎮護のために東寺とともに建立された官寺^{かんじ}です。

令和元年度の調査では、講堂跡^{こうどう}や軒廊跡^{こんろう}が見つかりました。講堂跡は、これまで西寺と東寺では同じ規模と考えられていましたが、調査の結果、規模が異なることがわかりました。

また、西寺の五重塔が推定される位置では、壺^{つぼ}地業を確認し、塔跡と考えられる礎石建物^{そせきたてもの}が建てられていたことがわかりました。



講堂跡の礎石と地覆座^{じふくざ}（南西から）
（京都市提供）

今里遺跡は、現在は水田地帯に位置していますが、古代から中世までは木津川の河原でした。平成25年度から平成30年度まで断続的に行われた発掘調査では、平安時代後期から江戸時代までの墓が多数見つかりました。墓からは、丹波焼の壺や瓦器鍋などを利用した蔵骨器、中国製の青磁碗・白磁碗、瓦質の佛華瓶、瓦器碗などが出土しました。

平安時代から江戸時代にかけての埋葬方法の変遷が明らかになり、貴重な成果を得ることができました。



今里遺跡第2～2次調査区全景（北から）
（八幡市教育委員会提供）



青磁碗



瓦質佛華瓶

瓦器碗

出土遺物



丹波焼壺
（蔵骨器）

丹波丸山古墳群は、丘陵尾根上に分布する古墳群です。平成30年度から令和元年度にかけての調査で、丘陵の尾根の一面をテラス状に造成した平坦地を確認しました。平坦地は溝で区画され、溝の西側では平安時代末期の経塚などが見つかりました。しかし、経筒や経巻は確認できませんでした。一方、溝の東側にも、平坦面が広がり、死者の追善供養などを行う空間として利用していたのかもしれない。



菊花双鳥鏡



平坦面と土坑群（北西から）



経塚検出状況（南西から）

満願寺跡は、鎌倉時代の建保6（1217）年に創建されたと伝わる寺院跡です。令和元年度に発掘調査を行い、礎石建物や石組溝が見つかりました。建物は平安時代後期から室町時代にかけて同じ谷の中で建て替えが行われ、継続的に使用されていました。

白磁四耳壺や国内で出土品として初めて確認された黒釉白堆線文壺などの中国製陶磁器が出土しています。



発掘調査で見つかった礎石建物（南西から）



満願寺跡出土遺物



黒釉白堆線文壺

（左：満願寺跡出土品、右：大阪市立東洋陶磁美術館所蔵品）



室町殿跡は、永徳元（1381）年に室町幕府3代将軍足利義満によって造営された邸宅跡です。令和2年の発掘調査で、巨大な景石を配した庭園跡が見つかりました。足利将軍家の権威の高さを象徴するような庭園であったと考えられます。

出土遺物から、この庭園は義満の孫にあたる8代将軍義政の時代に造られたものと考えられます。義政期の室町殿の施設については分からない点も多いのですが、これまでの発掘調査成果から、文献史料や絵画に描かれた姿を垣間見ることができます。



庭園跡の全景（西から）

（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所提供）

犬飼遺跡は、亀岡盆地南西部の扇状地端に位置しています。平成30・令和元年度の調査では、巨大な堀で囲まれた^{ほうけいきょかん}方形居館跡が見つかりました。出土した遺物から、13世紀後半から14世紀前半にかけての居館であることがわかりました。

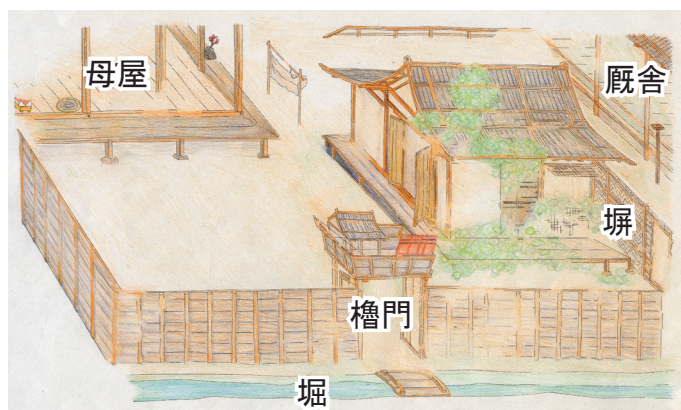
どのような人物が住んでいたのかは明らかではありませんが、堀の規模が巨大であること、中国製陶磁器や漆器碗^{しっきわん}などの高級食器が出土していることから、地域の有力者が居住していたと考えられます。



堀から出土した漆器碗



堀①の土層断面

絵巻物に描かれた武士の居館
(『一遍上人絵伝』を参考に作成)

方形居館跡の全景（上が北）

調査地は、京都市の中心部、京都府庁の敷地内です。平成30・令和元年度の調査では、平安時代から明治時代にかけての遺構が見つかりました。

注目されるのは、室町時代に掘られた防御的な役割を持つ「構」の一部が見つかったことです。堀を埋めている土砂が南側から流れ込んでいることから、南側に土塁があったと考えられます。堀の南側には塀などの施設と考えられる「布掘り柱列」が見つかっています。「布掘り柱列」は深さが1m以上あり、柱が沈まないように礎石を置いていました。このことから、人の背丈以上の塀や櫓のような防御施設があったと考えられます。

こうした防御施設である「構」は、当時の京が動乱の中にあったことを示す遺構といえます。



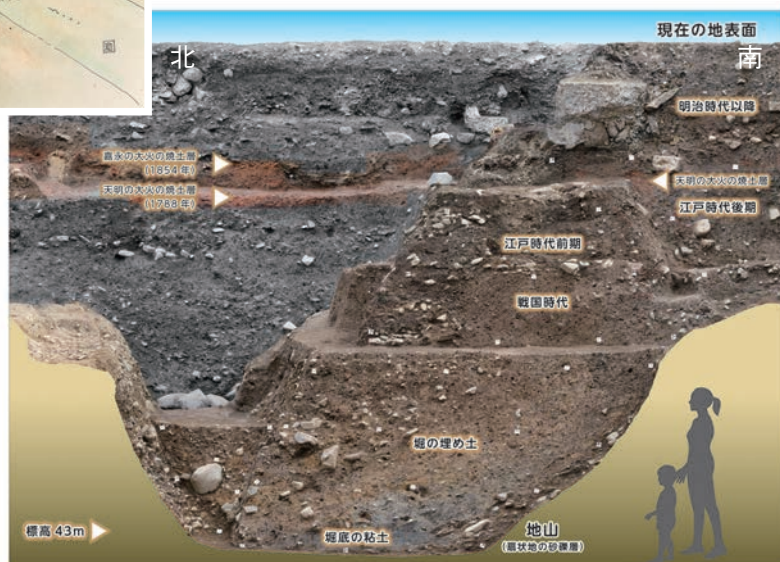
調査で見つかった堀跡（北西から）



「構」の復元想像図（早川和子・画）



堀2から出土した中国製青磁碗



堀3の土層断面（東から）

この調査地は、江戸時代になると、多くの人々が住む場所となりました。

当調査地周辺は、江戸時代後期に町屋^{まちや}が立ち並ぶ地域で、町家に関連する暗渠^{あんきょ}や井戸、かまどが見つかりました。また、町人たちが使用していた陶磁器が多く出土しました。



町家から出土した菊御紋付染付碗



江戸時代前期の町家建物の基礎（北から）



道八銘の赤絵小鉢



天明^{てんめい}の大火^{たいか}の焼土と江戸時代後期の町家建物の基礎（南から）



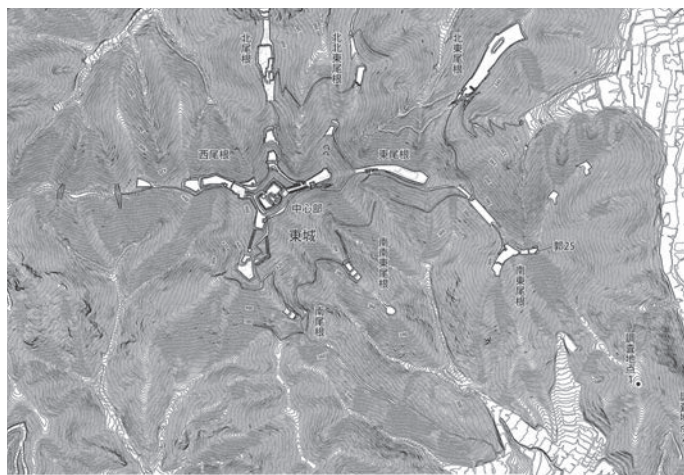
江戸時代後期の中国製陶磁器



稻荷狐の土人形

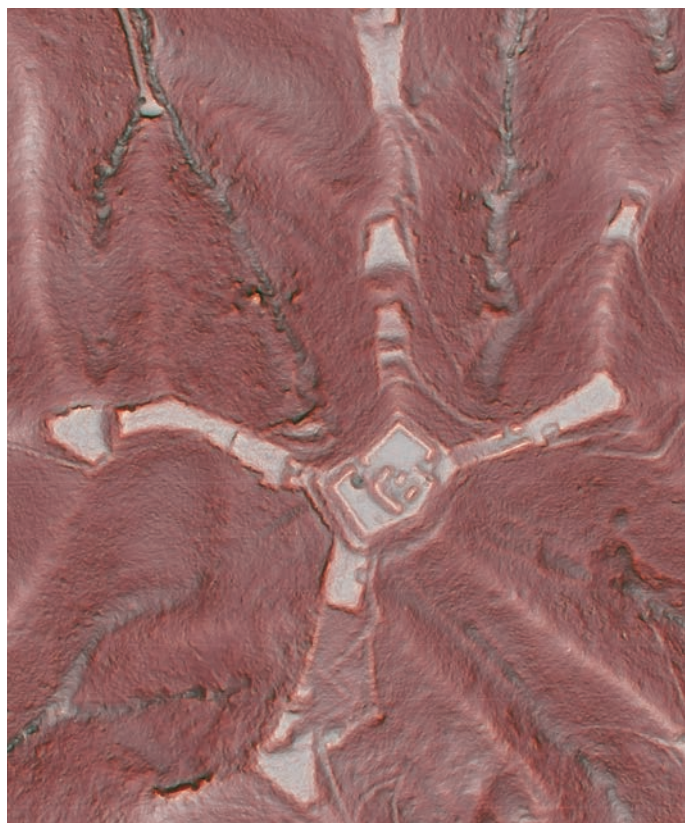
周山城跡は、^{あけちみつひで}明智光秀の丹波支配の一拠点でした。
光秀の丹波攻略が長期化する中で、^{てんしょう}天正9（1581）
年には築城されていたとされています。

周山城の全容は、京都市文化財保護課によって行
われたレーザー測量の調査により、城の郭などの詳
細が明らかとなりました。また、山城の規模も、東
西約1.4km、南北約0.7mに及ぶことがわかりました。



周山城跡縄張図（全体）

（『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和元年度』より転載）

周山城跡（中心部）赤色立体地図
（京都市提供）へいあんきょうさきょういちじょうさんぼうじゅつちようあと
【平安京左京一条三坊十町跡】

平安京左京一条三坊十町は北を^{たかつかさ}鷹司小路、東を^{からすま}烏丸小
路、西を^{むろまち}室町小路、南を^{このえ}近衛大路で区画される町域です。
江戸時代前期には有力者が住んでいたようで、高級品の
陶磁器がまとまって出土しました。陶磁器が多数出土し
た土坑は、炭や灰を多く含んでおり、火災で生じたゴミ
を片付けた廃棄土坑の可能性が考えられます。

^{すいてき}陶製水滴（魚形）しのむこうづけ
志野向付

志野茶碗

あおりべとうみょうぐ
青織部灯明具

松尾寺遺跡は、「西国三十三所第二十九番札所」として知られる松尾寺の周辺に広がる遺跡です。松尾寺の山門にあたる^{さんもん}仁王門^{におうもん}の解体修理に伴い、発掘調査が行われました。調査の結果、平安時代から江戸時代にかけての基壇跡を複数確認し、松尾寺山門である仁王門付近の変遷が明らかになり



調査地全景（舞鶴市提供）



旧仁王門建立に伴う地鎮関連遺物

（上：土師器皿、下左：二朱判金、下中央：豆板銀、下右：寛永通宝）



二朱判金

（実寸の2倍）

ました。

また、調査では、現在の仁王門の一世代前の旧仁王門に伴う^{じちんこんせき}地鎮痕跡が基壇盛土中に確認され、^{かんえいつうほう}寛永通宝 12 枚、^{げんろくにしゅばんきん}元禄二朱判金、^{げんろくまめいたぎん}元禄豆板銀、土師器皿 2 枚などがまとめて出土しました。

江戸時代末期以降、京焼の一大産地であった「五条坂」の窯の1つである^{どうせんよう}道仙窯は、明治時代から昭和時代にかけて陶磁器の生産を行っていました。生産品は食器や花器、茶陶にとどまらず、理化学用の陶磁器も生産した登り窯でした。

調査では、3 時期にわたる窯体の詳細な記録が取られ、陶磁器類や^{かまどうぐ}窯道具、^{たいかれんが}耐火煉瓦が出土しています。



道仙窯の状況（左：新段階、右：中・古段階）
（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所提供）

展 示 遺 跡 位 置 図



「発掘された京都の歴史 2021 かつて京都に火山灰が降ったころ」展示図録

発行日 令和3年8月7日



編集・発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内 40-3 TEL.075-933-3877 Fax.075-922-1189

ホームページアドレス <http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 河北印刷株式会社